魔界水滸伝 15

栗本薫

KADOKAWA NOVELS

神州・不二の宮から七名の勇士が飛んだ。
異次元の虜囚となった、みづちの若長を救え

伝奇SF巨編

カドカワノベルズ

昭和六十三年十二月二十日初版発行

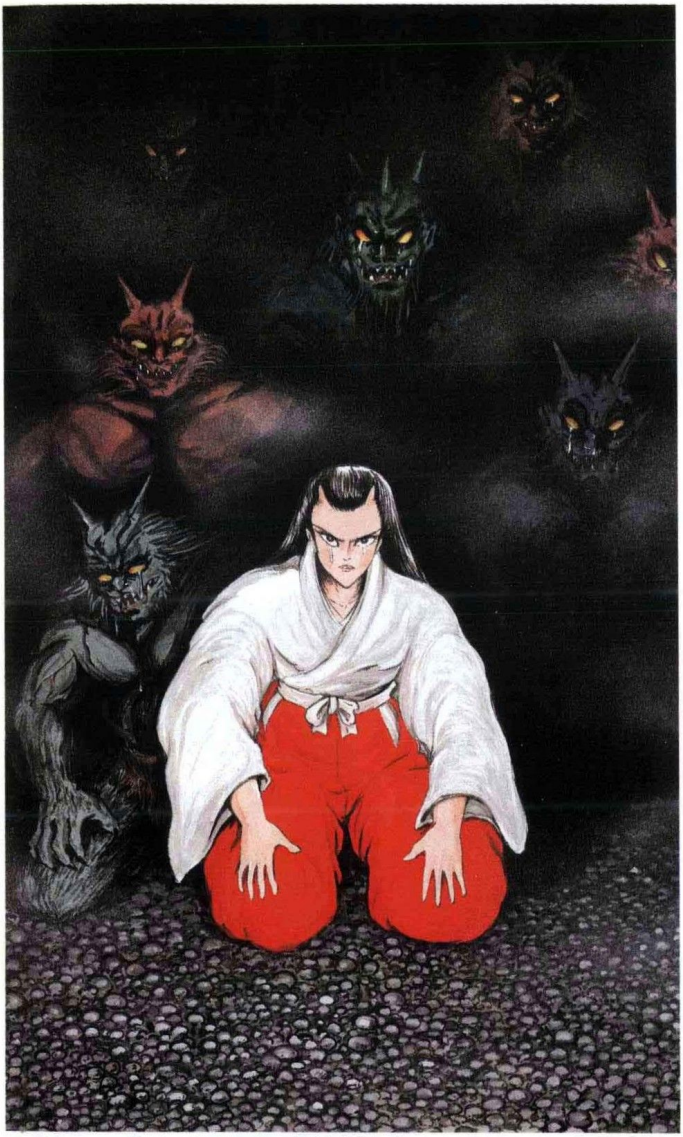
著　者　栗本薫（くりもとかおる）
発行者　角川春樹

魔界水滸伝（まかいすいこでん）15

印刷所　大日本印刷株式会社
製本所　株式会社多摩文庫
装丁者　岡村元夫

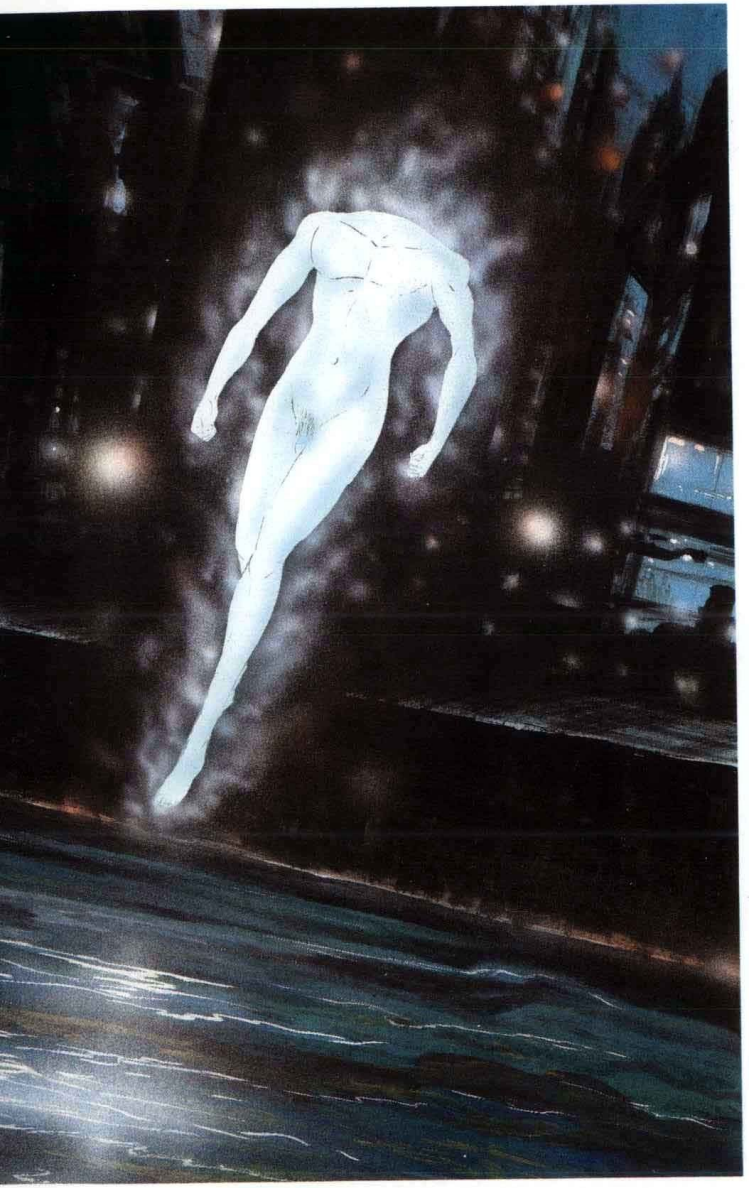
発行所　株式会社角川書店
東京都千代田区富士見二―一三　振替東京三―一九五二〇八
〒一〇二　電話　営業〇三―八一七―八五二一　編集〇三―八一七―八四五一

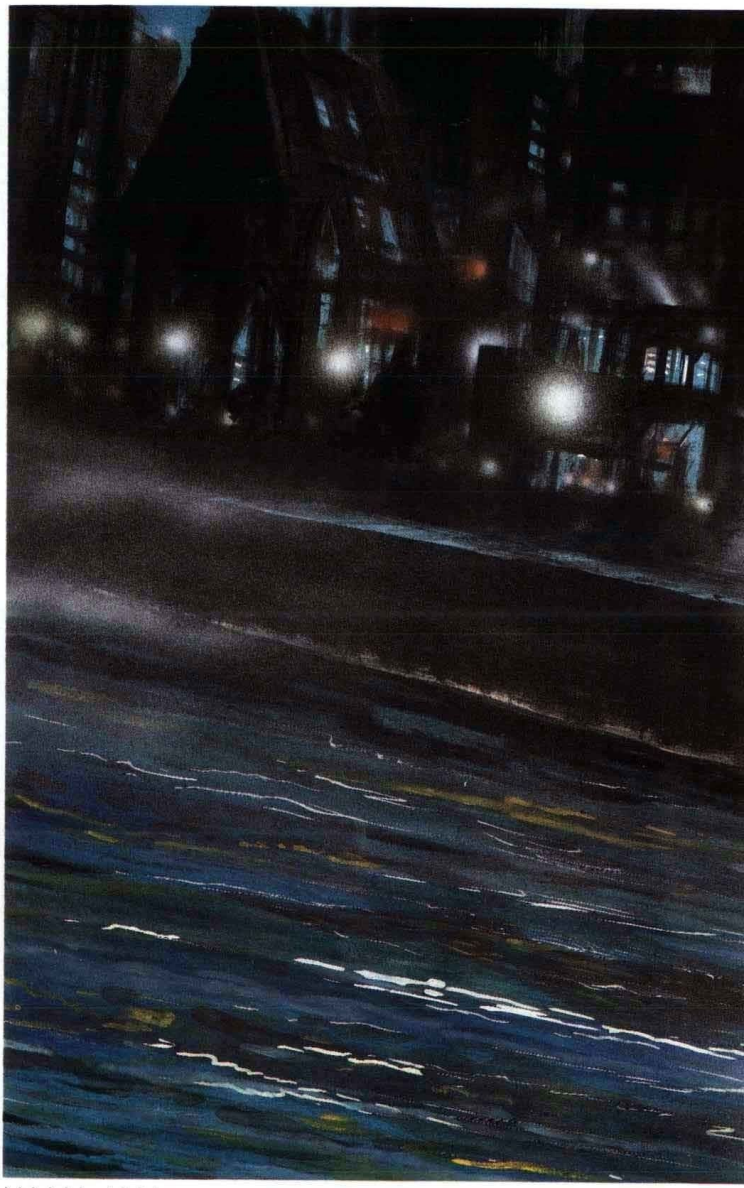
Printed in Japan 落丁・乱丁本はお取替えいたします
ISBN4-04-770915-8　C0293



いつのまにか――ずらりと、玉砂利の上に、大小さまざまの鬼どもが、あらわれていた――

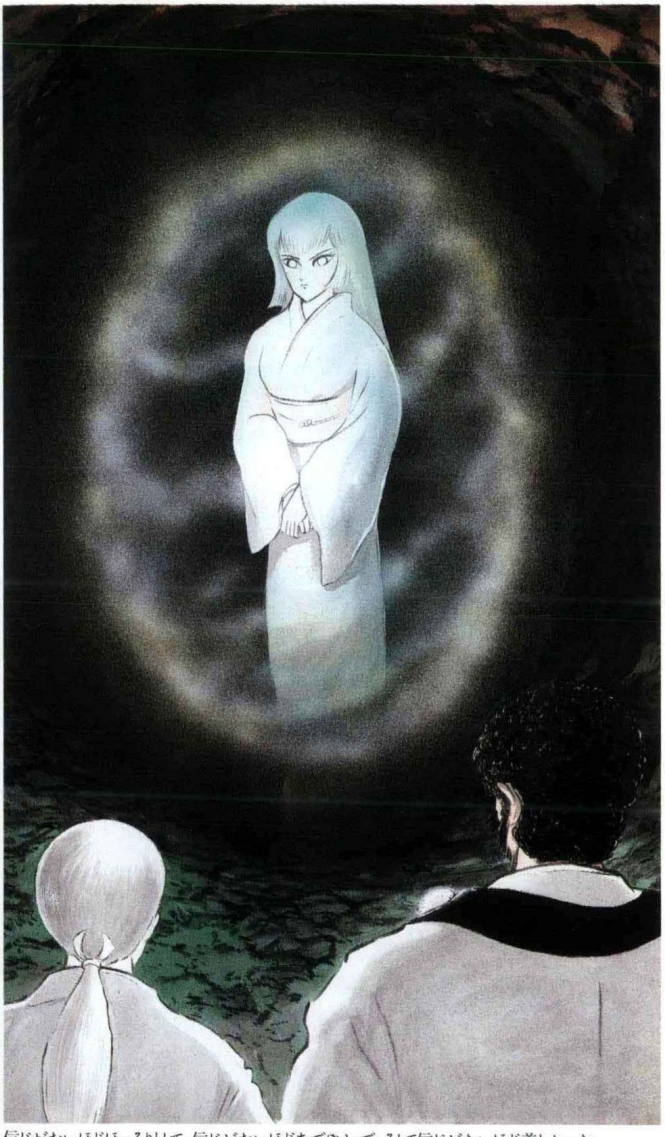
(本文第十三章より)





この人間には、首がない。首から上が、鋭利な刃物でスパリと切り落とされたかのように、何ひとつついていないのだ――（本文第十五章より）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb



信じがたいほどほっそりとして、信じがたいほどあでやかで、そして信じがたいほど美しかった——
「きれいだ」雄介は、風太がうめくようにいうのをきいた——〔本文第十六章より〕

KADOKAWA NOVELS

魔界水滸伝 15

栗本 薫

カバー絵・口絵・本文イラスト／永井豪

第十三章

1

ポタリ、ポタリ。
ポタリ。
どこかで、水のしたたる音がつづいている。
ポタリ……ポタリ。
同じ間隔をとって、かなりゆっくりと――しかしもう、どのくらいつづいているか、とっくに囚人にはわからなくなっている。
ただ、ポタリ……ポタリ、という、その単調なおそるべき音を、身体と、頭が、待ってしまっている。
いうまでもなく――
古い中国の刑罰に、拷問として、縛りつけた犠牲者のひたいに、こうしてゆるやかな間隔で水滴をしたたらせるものがあった。
たとえ、苦痛にはどのように意志強固に耐えうるものでも、この単調で、しかも時間のかかる責苦にかかっては、例外なく発狂した、といわれる。
その、拷問を思わせる単調な永劫の水の音。
それはいまや、《時》という名の処刑に似ていた。
が――
彼は暗闇にじっと目をこらし、むしろ、ひたむきにその水滴の音を待ってさえいる。
ポタリ……ポタリ……ポタリ。
ポタリ……ポタリ……ポタリ。
ポタリ。
ゆるやかに身をゆだね、それを数える。すでに数億何千万いくつまでは、数えたような気がする。
ポタリ――ポタリ。

（南無北斗妙見）
これは、すべて、まやかしなのだ。
現実、ではありはせぬ。――なぜなら本来、ここには《時》は存在せぬはずだ。《時》の存せぬところに、時の流れはありえない。
（と、すれば）
これはすべて、まやかし、いかさま、幻術にすぎぬ。
が――
それを、いうならば。
むしろ、（現とは何か）とまで、問わねばならぬ。
ここは何処で、
いまは何時で、
自分は何者で、
そして何故にこうして水滴のしたたる音をききつつ、暗闇の、ぬるぬると水っぽい地下牢の底にうずくまっているのか。
そもそも現実とは、何であるのか。
また、はたして、現実界というものは存在しているのか。
いるとすれば――何処に、どのように……
（南無北斗妙見――南無北斗妙見）
（ココハ――ドコダ）
（オレハ――ダレダ）
すべてが、とてもよくわかっていて、しかもわからぬ。
すべては、うつつなのか、夢なのか。
が、夢だとすれば、それはそもそも誰の夢であるのか。
いや――
（夢トハ何ダ）
（夢トうつつトハドウ違フノダ）
（ココハドコダ）
（オレハ――ダレダ）
人ならぬ身に、いまさら、そのようなたわいもない問いにおびやかされなどせぬ、とはいいながら

――

どこまでが自らの身にまことにおこっていることどもで、どこからが、おこっている、と暗示を与えられていることであるのか。

それを見きわめようとすると、再びあのめまいのするような単調なしずくの音がさえぎる。

ポタリ――

ポタリ……

ポタリ。

自分は、狂うだろうか、と彼はうっすらと考えた。

彼が狂ったら――

もし、彼が狂ってしまったならば。

誰にも、彼を止めることはできぬ。この世にただ一人を除いて。そして、そのただ一人は、彼を止める気をもたぬ。

いや――あるいは、他にも……

だが……

ポタリ、ポタリ、ポタリ。

心もち、水音が、早まったような気がしてくる――が、おそらくは、それも気のせいかもしれぬ。

あるいは地獄とは、まさしくこのことであるのかもしれなかった。

暗黒の永劫――狂った水。

(南――無……北斗妙見)

(狂いは――せぬ)

(狂うわけにはゆかぬ――狂うわけには……)

彼は再び水滴を数えた。

いまとなってはむしろ、その永劫の責苦に身をゆだねきることこそが、もっともたしかな正気を保つ方法であった。

*

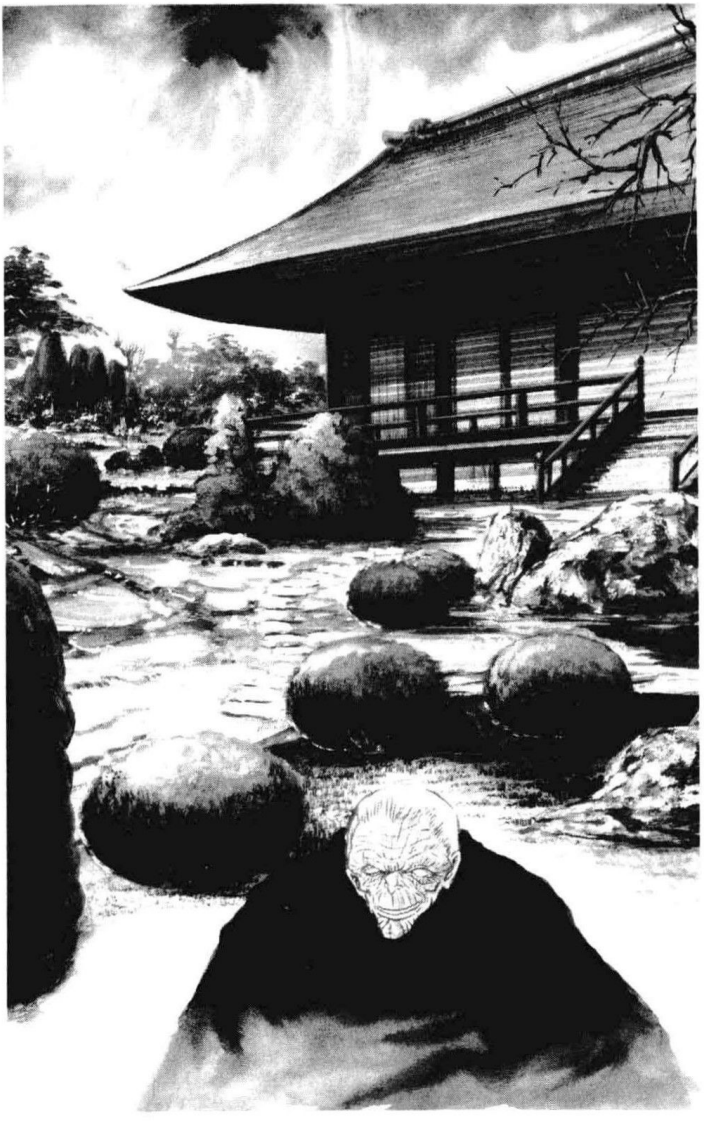
「イヤじゃよ」

北斗礼津は言った。

きわめて、断固とした、まったくあいそというものかけらもない言い方であった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

「イヤだね」
「……」
一瞬、あまりにもあっさりとした言われように、このお婆は、何か、まったく誤解しているのではないか、と、一同は思わず絶句して、顔を見あわせる。
みづち一族の大族長は、このようすを、ひからびた梅干しのような顔の奥から、しょぼしょぼとまたたく小さな目でずるそうに見まわした。
一同――火の民の若き族長伊吹風太、禍津神の長安西雄介、その弟安西竜二、そして《神剣》加賀四郎と、役行者の魂魄、先住者の中でも誰もが一目おくであろう、そうそうたる顔ぶれの筈である。
が、北斗礼津はいっこうに、いかなる感銘をうけたようにも見えなかった。
魔界・不二の宮――みづち一族を頭といただく、神州先住者の半ばが本拠地とする、神界の砦の奥まった一室である。
クトゥルー軍の侵攻が、魔界の根とする現実界に及んで以来、不二の宮は、神州防衛の砦たるべく、がっしりと守りをかため、西の魔界・葛城の宮、南の魔界・高千穂の宮と、神域をわかちあっている。
外の宮へまで出てゆけば、下っ端の魔族、眷族にいたるまでもよろいかぶとに身をかため、いまがまさしく神州の興亡にかかわる大いくさの真只中なりと実感させるものものしさであるが、奥の宮ともなれば、そこはしんとしずまりかえり、何か日ごろと異ったことがおこりつつあるとうかがわせるきざしすらない。
が、この遠来の客人によって、少しでも変化があるとすれば、それは、南国の高千穂の宮がそのままこの東国へひっこしたかという、唐突な、異様なまでの暑さであった。
まさかにその、ふいに八月の炎暑が訪れたかという熱気が、この広々とした書院づくりの一室にきちんと正座し、白づくめの着物と袴のひざに手をおいて、白銀に輝く髪を銀のひもでたばねた、どちらか



といえば小柄な美しい少年ひとりから発散しているのであろうとは、知らぬものにはとうてい理解できぬことであっただろう。

火の民の若長、伊吹風太の、切れの長い、武者人形のそれをほうふつとさせる眼は、きッと青い光をたたえて、まじろぎもせずに目の前の大きな座布団のまん中に古い置物のようにすわっている、小さな老婆を見すえていた。

その目がかっと光るたびに、そのしなやかな全身から、めらめらと目にみえぬ炎熱が立ちのぼり、室全体の温度をぐっと上昇させる、そんなふうに思える。そしてそれは、決して錯覚ではなかった。

ずっと高千穂の宮以来同行して、ようやく馴れてきたとはいいながら、しょせん生身にすぎぬ加賀四郎はこの少年の発散する熱にへきえきして、ときおりそっと額の汗をぬぐっている。が、他のものたちは、さすがに汗ひとつみせはせぬ。

「礼津女」

つと膝をすすめたのは、役小角であった。

「まあそのようにむげにいうたものでもあるまい。若い者たちも話のつぎほを失うでな。いまひとたび、せめて、若い者どもの話をきいてやってはどうかの」

「こは、古馴染のせっかくのおおせいでとは申すものの」

北斗礼津はくしゃくしゃと顔をゆがめたので、あまりにふかい皺にはまりこんで、どこが目やら、鼻やら、口やらさえ見当がつかなくなった。

「こりゃ、内々にいろいろ諸わけのあること、ちと放っておいてもらいましょうかいのう」

「それは、いろいろ、わけのあるのは承知じゃがな」

「しかし、何を申すにも」

加賀四郎が汗をふきながら口をはさんだ。

「ことはお身内の大事にこそかかわること、われわれが、かく参じましたるもつまりは」

「わかっとるわえ、ようわかっとるわえ、お若いの」
礼津はしわの何本かをもちあげて、その下からすばやい一瞥を加賀にくれた。
「お身たちが、まことの深切からこうしてわざわざおいでたのじゃということも、このばばにはようわかっとるわえ」
「まことにしかとおわかりか」
「わかっとるわえ」
「たしかに」
「くどい」
礼津はじろりと加賀をにらんだ。
風太がつと膝をすすめると、ふわっと熱気が舞い立った。
「みづちのは、たしかに《グレイト・オールド・ワンズ》の手中にとらわれの身となっております。もはやその幽閉も地上の時間にして半月に及ぶはず、その間に、どのような責苦が加えられていようかは、察するにあまりありましょう」
「あやつはの」
礼津は怖い顔を風太に向けた。
「たかが異次元のカメだのミミズだの——おや、こりゃわが陣中では禁句であったぞいの——そんな妙てけれんなバケモノ共にいたぶられて、音をあげようがほどのかわいげはないぞい」
「そ、そりゃ強弁と申すもの。若長のお力とて、限りはあること——」
「力に限りがありゃ、そりゃそのときのこと、そやつの運がそれまでゆえ、死ぬるなり、どうなり自分でしでかしおるじゃろ」
「とんでもないことを」
風太は叫んだ。
「いまははや我が身の恩愛憎をこえて物申すべきときかと。——はばかりながらこの伊吹、お身がたとはもとより、かの葛城の宮以来のあらそいついにおさまらず、同じ先住者の身ながら敵どうしと矛を

まじえるところまで参りました。しかしここにおいでの加賀先生の情理をつくせしおことばにより、いまは私情私怨をこえるべき時と悟りしにより、このようにはろばろとおたずねもいたしております。

――されば、いまさら、わが兄のうらみは申しますまい。いまこの期に及んでは、何よりも大切なのは、われらが神州を守ること、現実界をわれらが手にとりもどすこと――そして、そのために、みづちのの強大な力は欠かすことができませぬ。ましてや万が一、みづちのが、万々が一、千万が一にも、敵がたのあやしき力により、その心をのっとられ、その強大なる力がわれらの上に向くことがあっては――」

「そのときゃ、お前さまが、あれを焼き殺すなり、煮殺すなり、したがよかろ」

へらへらしてはいるが、底に何か、ぞっとするようなものを秘めた声だった。

「このばばは、文句は言やせんぞい。敵にふんづかまるだけでもみづちの名折れといえように、それをその上、洗脳されたり、味方に弓ひくようなやつは、孫とも思わぬ、ばばともいわさぬ、ましてやわがみづちの長なんぞとは、二度とは名のらすもんじゃないわさ」

「でもございましょうが、しかし、ばばさま――あ、これは失礼を」

のどかに加賀が口をはさむ。

「よいわさ」

「ですか。これはかたじけない。――でははばさまとなれなれしくこうお呼びさせて頂きますが、ばばさまはおん自らがさほどにも強力無双なればこそそのようにいわれる。なにせ天地創造の女神だ。しかし八岐どのは、まだお若い。お若けりゃこそ、人間的でもある」

「このばばはそれほど人間ばなれしておるかよ、ええ？」

「あいや、そ、それは――しているじゃありませんか」

「こやつ」
「八岐どのはずっと人間で暮してもおいでなら、人間族としたしくまじわってもおいでになる。おのづと、ばばさまとは、お考えも違うて来ようというもの。――にせよ、ともかくまた、今回のことに関しては、責任は月基地の始末をむりやりおねがいした、この加賀にもありますこと、それをむげに、敵の手におちたが失策とおおせられては、あまりに八岐どのとてもお気の毒」
「なんの気の毒なことがあるものかえ」
怪婆はじろりと加賀をにらんだ。
「ぬしをどうこうとがめはせぬよ。ぬしゃ何もまちどうたことはしとらぬ。ぬしゃただなすべきようになしとるだけじゃないかね。それを四の五の言いやせぬわえ。わしはただ、多一郎のトロいのが許せぬ」
「トロい……」
加賀は絶句した。あの、精悍かつ残忍、冷酷無比なみづちの若長に、これほど似つかわしからぬ形容は、思いつくこともできなかったであろう。
「そ、そりゃ、あんまり……」
「多一郎はの、四郎丸」
礼津は不興げに、
「色に迷うた阿呆者よ。わしがごとき者でも、子よりもなお孫はかわいいもの、かわいけりゃこそこれまでもつい、したいようにさせてきたのがまちがいであったそうな。あの小蛇めのうろたえたザマは何じゃ。人間の小せがれに血道をあげて、あっちにうろうろ、こっちにうろうろ、揚句の果てがこのザマで、人間のぬしにまでさえ庇うてもらうのかい。わしゃ情けのうて涙も出ぬよ」
「そ、そんな」
「しょせんあのような性根じゃいま救い出して貰うても同じよ。どうでいずれ、あの弱みをつかれ、地球軍とやらに迷惑をかけるがオチじゃろ。なら、いまのうちに早うさっぱりとくたばったがよっぽどマ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb